
伝説の双剣

龍帝元祖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の双剣

【Nコード】

N9367R

【作者名】

龍帝元祖

【あらすじ】

この世界に幾多も存在する伝説の一つ。 黒龍伝説。

この物語は黒龍伝説から200年後の物語。

黒龍伝説、第五部。 『伝説の双剣』

森と丘

透き通る様な青空。所々に小さな雲が浮かび、とても心地良いそよ風が走る草原が広がっている。

その大地にアプトノスの群れが川に向かって移動をしている。

その群れの先頭辺りは既に、空のように透き通った川で喉の乾きを潤していた。

そんなのどかな時間は、一瞬にして過ぎ去った。

十数メートル先の茂みから二匹の青い狩人、ランポスが現れたのである。

ランポス達はアプトノスの群れに吠えながら近づいて行く。

アプトノスの群れは我先にとばかりに逃げ出した。蜘蛛の子を散らすとはこのことだろう。

一目散に逃げ惑うアプトノス達、しかしアプトノスの子供である小柄な者は逃げ遅れていた。

ランポス達は予想通りとばかりに小柄なアプトノスを追う、しかし小柄なアプトノスの横を走る大柄なアプトノスが急に速度を緩め、反転した。

おそらく小柄なアプトノスの親であろう。

ランポスに対し威嚇するように吠えるアプトノスの親、だがランポス達は怯みはしない。

アプトノスの親は尻尾を左右に降って攻撃するも、虚しく空を切る。

その隙を見てランポス達は左右に別れ小柄なアプトノスを追って行った。

アプトノスの親が追いついた頃には、小柄なアプトノスは餌食になっていた。

アプトノスの親は悲しそうな鳴き声を上げ、幾度か後ろを振り向

きながらも群れに戻って行った。

小柄なアプトノスの肉をついばむランポス達。

その空間だけ急に影がかかった。

何かの気配を感じたのか、二匹のランポスは同時に空を見上げ、その瞬間に餌から飛び退のく。

アプトノスを足で掴む様に降り立ったのは、赤い鱗に身を包んだ空の王リオレウスだ。

突然の乱入にただ吠えることしか出来ないランポス達、だが空の王の一吠えで呆気なく去っていった。

リオレウスもまた餌を足で掴み空へと飛んでいった。

ここは人々に森と丘と呼ばれる地。

この世界は単純な連鎖で出来ている、弱肉強食と言う食物連鎖でだ。

ただし、そのサイクルの中で、人々は孤立の道を歩んでいた。

ギルドナイトの青年

緑色の草原にカーペットが引かれた様に伸びる細い道。

その道には所々に草が生えている。

長年、人や竜車が通って自然と出来た道の様だ。

その道を進む一台の竜車があった。

運転はアイルーに任せ、後ろの座席に一人の青年が乗っている。

真っ赤なギルドナイトの制服を着ているが、胸元のボタンは外され、元々七部丈の裾を更に捲り上げている。

「うーん…さすがに草原と言えど、正午は暑いものですね。」

と言いながら、被っていたフェザーで顔を扇ぎ始めた。

ギルドナイトにしては少々若く見える、さしづめ二十代前半と言ったところか。

「アイルーさん、後どのくらいでココット村に付くのでしょうか。」

青年は見た目と違い言葉使いは、まとものようだ。

嫌、アイルーをさん付けで呼ぶのはある意味変わり者だが。

運転をしているアイルーの耳がピクリと動き、後ろを振り返りながら答えた。

「旦那さん、いい加減その呼び方辞めるにや。何だか照れるにや。」

アイルーの頬が微かに赤くなる、毛で覆われているのに何故分かるかは謎だ。

「しかしアイルーさんも、旦那さんって呼んでますし。じゃあアイルーさんの名前教えて下さいよ。」

アイルーはもう一度振り向き、こう言った。

「僕の名前はジライヤにや。旦那さんは何て名前にや。」

青年は前に乗り出しながら右手の手袋を外し、運転席に出しながらこう答えた。

「私の名前はカイク・エドファードです。よろしくジライヤ君。」

「カイクさん、よろしくにや。」

ジライヤは汚れを落とす様に、右手を体に擦り付けながら言った。二人は握手を交わし微笑んでいる。

遅めの挨拶を交わしているうちにココット村と書かれた門を潜り抜けていた。

「やっと付きましたね。とりあえず宿に荷物を預けましょうか。」

森と丘からほど遠くない土地に一つの小さな村がある。

そう、それがこのココット村。

私がこの村に来たのには理由がある。

それはココットの英雄と会うため。

彼は黒龍伝説の当事者であり、今でも生きているという。

始めはその情報を疑っていた、何せ黒龍伝説は二百年も前の話、私だってガキの頃から聞かされていた物語だ。

彼は竜人族だったことはあまりにも有名だが、竜人族にしても寿

命が永すぎる。

しかし彼はその村に確かにいた。

竜人族は、我々人間とは桁外れな存在なのだろうか…。

コット村のハンター

「了解しましたにや。」

ジライヤは運転席に座り直し手綱を引いた。
カームも手袋をはめ直し元の席に座る。
すれ違つ村人達と軽く会釈をしながら、カームが乗る電車はコトコトとゆっくり宿に向かって行く。

「ジライヤ君、ちょっと止めて下さい。」

不意な言葉にジライヤの耳がピクリと動き。

「分かりましたにや。」

と言いながら、ジライヤは手綱をひいた。

「急にどうしたにや。」

ジライヤは振り向きつつ言った。

「ええ、ちょっと。この村のハンターさんを見かけまして。少し待ってて下さい。」

カームはそう言つと電車から降り、ハンターらしき人の元へ歩いて行った。

ジライヤはカームが歩いている先に目をやると、ピンク色の装備

に身を包むハンターが見えた。

何やら鍛冶屋の店員と話しているようだ。

「なあオヤッサン、頼んでた大剣まだ出来ねえの。」

そのハンターは鍛冶屋の受付に乗り出してぼやいていた。

言われた本人はタバコをふかし、ハンターの方を睨みながら答えた。

「だから昨日も言っただろうが。後五日ほどかかるって。」

睨み付けているが、元々薄目なのか迫力がない。

「なあー頼むよお、もうすぐレウス狩に行くんだからさあ。…ん？」

左肩をノックするように触れられたハンターは後ろを振り返った。

「…げ、ギルドナイトかよ。俺何か違反したか…？」

ハンターは突然のギルドナイトの訪問に少し驚いた様子だった。

「いえいえ、今日は取締りで来たわけでは無いですよ。少し良いでしょうか？」

カームは少し微笑みながら答えた。取締りじゃない、と聞いたハンターは少しほっとしたようだ。

「何かやましいことでもやってんのか？」

と店員が後ろから水を刺す。
ハンターが戸惑っているのに気が付いて、いじろうとしているの
だろう。

「なっ、やってる訳ねえだろが。どっちかって言ったらオヤッサ
ンの方だろ。見るからに怪しい。」

何だとこのやろう、とオヤッサンは言い返している。
そこからまた言い争いが始まってしまった。

「あゝ、ハンターさん。ちょっとよろしいでしょうか。」

そんな二人の言い争いを仲介するようにカイムが話した。
オヤッサンは分かってくれたのか、カイムの方を向けという感じ
で、カイムを顎で指している。

「ああ、わりいわりい。んで何だっけ。」

ハンターは後頭部をポリポリかきながら振り返った。

「話と言っても、ただマスターブレイドが刺さった岩の場所を教
えて欲しくて。この村のハンターさんなら知っているのではと思っ
て。」

ああ、あれね。着いてきな。
とハンターは歩き出した。

カイムはオヤッサンに軽く会釈をして、ハンターに付いて行った。

マスターブレイド

「そういえばアンタの名前聞いて無かったなあ。俺はドレイク、よろしく。」

ハンターもとい、ドレイクは急に立ち止まり振り返った。

「初めまして、カイルともうします。」

カイルとドレイクはぎゅっと握手を交わした。

「お、カイルは握力つえくなあ。」

「まあ、一応訓練は受けてますから。」

ドレイクはさらに力を入れた。

ドレイクの肩はフルフルと振るえている。

「じゃあこれならどうだい？俺は大剣使いなんでねえ、腕力なら自信があるんだ…よと。」

ドレイクは負けず嫌いな性格なのだろう。
しかしカイルは顔色一つ変えず答えた。

「うーん、なかなかですね。…ですが。」

二人の手がきしむ音が聞こえた。
実際にきしんだのはドレイクの方だが。

「いでで、痛いつての。参った参った。」

カイムはすつと手から力を抜いた。

「カイム、お前握力いくらあるんだつての。化物かよ。」

ドレイクは右手の平を擦りながら話した。

カイムは顎に人差し指を当てながら考えるように答えた。

「そうですねえ、200くらいでしょうか？」

「はあ？ババコンガかよ…。」

ドレイクはあんぐりと口を開けている。

その顔が面白かったのか、カイムはクスクスと笑っていた。

「まあとりあえず、道案内よろしくお願いします。」

ああ、そうだったな。とドレイクは歩き始めた。

まだ右手を擦っているようだ。

『ちよつとやり過ぎましたかね？』

「何か言ったか？」

「いいえ、いつてないですよ。」

カイムはクスクスと笑いながら付いて行った。
少し歩いて、ドレイクが話しかけてきた。

「マスターブレイドなあ、俺んちの裏に有るんだ。ずっと昔から有るらしくてな。あんな拔けない剣に何の用事があるんだ？」

「まあ、ただの観光ですよ。」

「観光ねえ、物好きな奴だな。付いたぜ、ここだ。」

そうこう話している内に付いたようだ。

家の裏の木の側に、何の囲いもなくそれは有った。

何かの墓の様に、ただ岩に刺さった一つの剣。

真っ白な諸刃の剣。

「コレが伝説の、マスターブレイド……。」

そう言いつつドレイクの前にでるカーム。

それをまた前に出るドレイク。

「まあ見てな……、ふん……むん……ん……んぎ……。
はあ、な。」

なって……、ドレイクは両手の平を肩位にあげた。

お手上げと言ったところか、本当に拔けないらしい。

「伝説は本当のようですね、ちょっと失礼。」

カームは一枚の布と何かが入った容器を取り出して、剣の前にしやがんだ。

「水で滑らせるきかい？」

「いいえ、ちょっとね。」

カームは容器から白濁した液体を、剣が刺さった岩に垂れ流し、布で磨き始めた。

マスターブレイドが刺さった岩

「何だあその液体……まさか……アンタの……」「コレは大地の結晶とモンスターの特濃を混ぜた、一種の研磨剤ですよ。この岩、何だと思います？」

ドレイクの話はカームに切られた。

カームの突然の質問にドレイクは考えこんでいる。

「何って、ただの岩にしか見えねえけど。あれか、スンゲー堅い鉱石か、剣抜けねえし。」

カームは研磨剤を注ぎ足し、更に磨きながら答えた。

「まあ、実際私も知らないんですけどね。伝説によると……ん、答えが見えてきましたねえ。」

カームは岩に付いた研磨剤を布で拭き取った。

予想が当たっていたことにニヤリと唇の右側だけをつり上げた。覗き込んでくるドレイク。

マスターブレイドが長年刺さっていた岩は、ドレイクが思っていた単なる岩や鉱石では無かった。

マスターブレイドが刺さっている部分が磨かれている。

そこから、闇の様に黒い鱗が覗いた。

まだ脈を打っている様な感覚がする。

まるで生きているようだ。

「何だこれ、気味がわりいな。」

「どおりで抜けない訳ですねえ。」

単に刺さっている訳ではない。

切口からマスターブレイドの刃に、黒く浸食してきている。

『……ケンニ……、フレテミロ……。』

「ドレイクさん……。」

「何だ？」

「何か言いましたか？」

「気持ちわりいこと言うなよ……、何か聴こえたか？……。」

『……剣に……、触れてみる……。』

「また言った、今度ははっきり聴こえました。」

「俺じゃねえよ、だから何て聴こえたんだよ。」

ドレイクには聴こえてないようだ。

カームは不安そうにドレイクの顔見上げた。

ドレイク曰く、小動物のような瞳だったそうだが。

「剣に触れてみるって……。」

カームはマスターブレイドに顔を向け、柄に右手を伸ばした。
直前で少し戸惑ったが、一気に掴んだ。

『……それでいい……、感謝する……。』

「何か感謝されました。」

ドレイクは何が起きているのかさっぱり分からなかった。

ドレイクが不思議に思っていた時だった。

「見て下さい、マスターブレイドの刃が……。」

カームが言うように、マスターブレイドの刃が徐々に薄く赤い煙の様なものに包まれていく。

徐々に赤色が増していき、まるで剣から炎が吹き出てる様になった。

「何だこれ、カーム何やってんの。」

「ただ剣を握っただけだが？」

あれ？口調変わってね？とドレイクは思ったが。

驚きのあまり口にはできなかった。

カームの口調だけでなく、雰囲気と言うか覇気と言うか、何やらモンスターの殺気に似たものを感じたためだ。

伝説の復活

時同じくして、ココット村のハンターズギルド。

受付のテーブルの上に座る、竜人族の老人がいた。

彼がココット村の村長である。

「……ん、コレは……。」

何やら異変を感じ取った彼は、閉じていた目を大きく見開いた。

「こうしちゃおれんわい。」

受付のテーブルから飛び降り、ハンターズギルドから急ぐ様に出
て行った。

「おい、何か切口が動いてるぞ。」

ドレイクの言葉で切口を見るカイク。

浸食されていた剣から、黒い部分が避ける様に引いて行くのが見
える。

「もしや、少し後ろに下がってくれ。」

ドレイクはゆっくり下がってくれた。

それと同時にカイクもゆっくりと腰を上げる。

ドレイクが先ほどやったように無理矢理引っこ抜いた感じでは無
かった。

カイクが腰を上げると同時に、抜けるはずがなかった伝説の剣は、
雑草を抜くよりもすんなりと天を指した。

炎の様に舞い上がっている物も、剣に吸い込まれる様に消えていった。

「抜けちゃいましたね……。」

「……口調戻ったな。」

何がです？と振り返るカイル。

自分では気付いていないのか、カイルは二重人格かとドレイクは思った。

『愚かな人間達よ、いずれ……また。』

先ほどの声だ、さっきは地面から聴こえた気がしたが、今は上から聴こえたのかカイルは上を見ている。

「ちと遅かったか……。」

ドレイクの後ろに、一人の老人が立っていた。

少し息を切らしたその老人は、ドレイクの腰辺りくらいの身長だった。

振り向きながらドレイクは言った。

「爺さん、どうしたんだ慌てて？」

「抜いちゃまずかったですか？」

カイルは事の重大さを理解していない。

「まあ良い、いずれこうなる事は分かっておったわい。とりあえ

ず二人とも、付いてきなさい。」

そう言い終えるか否か、老人は元来た道を歩いて行く。

「やっぱりまずかったでしょうか。」

カイムはドレイクの耳元で囁いた。

「まあ大丈夫だろ、ってかちけえよ。」

カイムを振り払う様にするドレイク。

『カイムのさっきの変わり様はなんだったんだ？』

ドレイクには好ましくない状況となった。

何度も引き抜こうと試していた物が、さっき出会ったばかりの人物にすんなり抜かれた気分は、嫉妬に近いものを感じていた。

そして三人はゆっくりとハンターズギルドに入って行く。

伝説の英雄

ココット村のハンターズギルド。

天井は二階まで突き抜けているので広く感じられる。

と言ってもその広さは、ギルド本部があるミナガルデのそれとは雲泥の差である。

「こつちじゃよ。」

ハンターズギルドをあちらこちらと見ていたカイムに告げられる。

老人とドレイクは二階につながる階段を上っていた。

「どこにいくのでしょうか。」

ドレイクの背中を追い、カイムが話しかけた。

「説教部屋だよ、しっかし何であんなに怒ってたんだ？」

『ドレイクさんでも分からないのか、何か嫌な予感がしますね…』

カイムは長旅での疲れが有ったが、それ以上に疲労感が有った。鬼人化を使った時のあの疲労感だ。

ジライヤがちゃんと宿の受付を済ませてくれているか心配だが、今日は早いとこ眠りに付きたいと思っていた。

「ここじゃ、二人とも入りなさい。」

二階の一番奥の突き当たりの部屋、他の部屋よりもそのドアだけ少しばかり豪華に作られてある。

「久しぶりだなこの部屋。」

ドレイクは何度か入ったことが有るようだ。

説教部屋と呼ぶだけのことで、苦い思い出が有るのか。

部屋の中には本棚が壁一面に有った。

部屋の中心に大きな机があり、会議室の様になっている。

老人はドアに一番近い椅子に腰掛け、二人は自然に反対側に座った。

「お主の名前は？」

少しの沈黙の後、それを切ったのは老人だった。

「カイル・エドファードです。ご覧の通り、ギルドナイトです。」

「エドファードか…もしや、お主の家系は代々ギルドナイトではないかね？」

「はい…何故それを？」

老人はやはりか、と呟いた。

「申し遅れたのお、わしはこの村の村長であり、このギルドのマスターをしておる。名前は遠の昔に忘れたわい。」

「あなたが、伝説の英雄ですね。」

ドレイクは、え？そうなの？と二人の顔を交互に見ている。

その部屋に静かな風が流れる音がした。

「お主には話しておかなければならんのお。その剣を抜いた時点で、もう後戻りは出来ぬ。」

「ちよつと待てよ爺さん、俺にはこの剣を抜いてみるって言つてたじゃねえか。より強いモンスターを狩ればいずれ抜く事が出来るつて。」

二人の間に急に入るドレイク。

「それはお主の成長のためじゃドレイク。お主には抜けぬ事は分かっておったからのお。」

カームには可能、ドレイクには不可能。

ドレイクには納得がいく話では無かった。

宿命の血

「ふざけんなよ。」

ドレイクは両手で机を叩く様に付き、立ち上がる。

「何故だ、俺にはまだ力が足りないってのか？」

ドレイクは立つたまま続けた。

「落ち着くのじゃドレイク。剣を抜くのに必要なのは力では無いのじゃ。」

「じゃあカイルに有って、俺に無いものは何なんだ。」

ドレイクの口調は先ほどより少し落ち着いているようだ。

村長はカイルを見、ゆつくりと口を開いた。

「……血じゃよ。」

「血……、ですか。」

カイルは呟く様に答えた。

「カイル、お主は黒龍伝説を追って、わしに会いに来たのじゃの？しかしお主自身も、伝説に近い存在なのじゃ。」

「ただの観光じゃなかったのかよ。」

ドレイクはまた腰を下ろした。

「すみません、その通りです。しかし伝説に近いとは……。」

カームはドレイクに謝り、村長に質問した。

「わしが黒龍と戦った時、わし以外に四人の仲間がおった。その中に一人ギルドナイトがおった、名はケイン・エドファード。エドファード家は何世代にも渡りギルドナイトじゃろ。」

「確かに、私の家系はずっとギルドナイトと聞いています。ですが、その方の血が流れているのか……。」

「現にマスターブレイドを抜いておろう。それが紛れもない証拠じゃ。黒龍の封印は、黒龍を封じた者達しか解くことは出来ぬ。」

「封印って、じゃあ封印が解けちゃった黒龍はどうなる？」

ドレイクが身を乗り出し、村長に聞く。

「奴らは肉体が滅んでも、いずれ復活する。」

「復活するとどうなるのです。」

カームも身を乗り出してきた。

「人類を滅ぼそうとするじゃろっ。」

「そんな……、私は何て事を……。」

カイルの視線は落ちてしまった。

「お主が悪いのではない。そもそも、封印はもう長持ちしなかったのじゃ。伝える者がいなくなる前に、お主がこの村に来たのもまた宿命なのかも知れん。」

「長持ちってどうゆう事だよ。」

村長はドレイクの方を見た。

「わしはもう長いこともたぬ。」

「ええ、全然ピンピンしてんじゃん。」

ドレイクは村長を疑った様な目で見ている。

「そもそも何故あなたは200年以上も生きているのです?」

カイルはずっと疑問に思っていたことを口にした。

「それは、神との契約じゃよ。」

「神との契約……。」

神との契約

「そう神との契約じゃ。わしは封印が解けるか、宿命の血を持つものが封印を解くまで見届ける義務があつたのじゃ。しかし封印の力も衰えておつてのお。その契約も、今日で終わりじゃ……。」

村長はそう言つと、窓の外的光に目をやった。

哀しくも、涼しげな目をしていた。

「爺さん……、俺には……何も出来ないのか……。」

ドレイクは恐る恐る聞いた。

人類の危機を知り、指をくわえて時を待つことが出来るはずが無かつた。

「残念じゃがな、黒龍の力は絶大じゃ。お主の力では足手まといになるだけじゃ。」

とても厳しく、逆にドレイクの事を思つた言葉だつた。

「……力か……。」

「ドレイクさん……。」

ドレイクはゆっくりと腰を上げ、静かに外へ出ていった。

彼は目を瞑り、少し笑っていたように見えた。

「ドレイクさん、大丈夫でしょうか……。」

村長は眉をひそめ、苦い表情だった。

「うゝむ、ドレイクにはちと可哀想じゃが、あやつのためじゃ。」

黒龍と戦うのは、それほど厳しい事なのだろう。

「一つ聞いても良いでしょうか。」

「何ぞな？」

沈んでいた表情をすつと上げた。

「仲間の名前を覚えていて、何故ご自分の名前を覚えていないのですか？」

村長の眉がピクリと動いた様に見えた。

「代償じゃよ。」

カームは少し前の事を思い出す。

「……契約の……、ですか？」

「そうじゃ。長い命と引き換えに、名を失ったのじゃ。何を失うかは後にしか分からぬ。まあ、名前など軽い方じゃよ。」

なるほど……伝説に名前が残らないのもそのせいかな。

他にどんな物を失うのだろうか。

それもいずれ自分の身に……嫌、その前に命を失うかも知れない。

自分を犠牲に、人類を救う。

そんなことが自分に出来るのだろうか。

「……おお、忘れる所じゃったわい。ちょっと待つとれ。」

そう言いながら村長は、部屋を出た。

さほど時間を置かず帰って来たが、腕に細い木箱を持って来た。

それを机に置き、木箱の蓋を開きながらこう言った。

「こやつをお主に託そう。」

対なる剣

「これは……、マスターブレイドが二つ……？」

自分が抜いた剣、それは机の上に置いてある。

交互に見れば見るほど二つの剣。

「嫌……、これはマスターブレイドと対なる剣、ヒーローブレイドじゃよ。」

「ヒーローブレイド……。」

カームは木箱からヒーローブレイドを取り出した。

マスターブレイドを手にした時は考え無かったが、2000年の時を経て切れ味は落ちていない。

コレが真の業物と言すべき物だろう。

マスターブレイドとヒーローブレイド、2000年も別々だった兄弟がまた一つとなった。

「その剣の真の力を引き出せるかはお主しだいじゃ。」
真の力……、マスターブレイドを抜いた時の、あの赤い炎の様なものだろうか。

鬼人化に似ているが、明らかに大きく、剣から吹き出ている感じだった。

「そろそろ時が来たようじゃな……。」

村長はいつの間にか窓際で外を眺めている。

そこから見る景色を惜しむように。

「老いぼれの昔話などもうどうでも良いのじゃ。今度はお主が伝説を作る番じゃ……」

村長はゆっくりとこちらを向いた。

「気を付けて、お行きなさい。」

村長の顔は、暖かな笑顔で満ちていた。

「はい、行って参ります。出来れば、またお会いしたいものです
ね。」

カームは少し苦笑いと言った感じた。

今日と言う短い時間の中で、自分の人生、そして人類の全ての命を駆ける事になるうとは思ひもしなかったからだ。

だがここで止まっていはいけない。

そう決意を胸に、その部屋のドアを開いて行った。

「カームか……、ケインにそっくりじゃよ。懐かしいのお、ブル
ーダー、レム……、」

村長は本棚から一冊の分厚い本を取り出し、机に伸せた。

その最後のページを開き、挟まれた写真を取り出した。

「ミリア……。」

その写真には一人の女性が写っていた。

黒龍との戦いで、唯一死んだ仲間であり、彼の婚約者であった。

その写真が挟まれていたページの左下にはこう書かれている。

『この話を後世に残す。ケイン・エドファード著』

力を欲する者

何故俺じゃなくカイルなんだ……。

何故カイルに有って俺には無い……。

力を手に入れるために俺はずっと努力をしてきた……。

なのに宿命の血だと？……、ふざけるな。

俺は力が……、力が欲しい……嫌、必要なんだ。

絶対的な力が……。

『何故そんなに力を欲する？』

「誰だ？」

ふと我に返ると、周りには誰もいなかった。

いつの間にか、自宅の裏の方にいた。

そこにはもう求めていた力は無い。

『マスターブレイドを超える力が欲しいか？』

また聞こえた、カイルと同じ状況なのか？

「マスターブレイドを超える……、そんな力が有るのか？」

『我に従え、さすればいずれ手に入れることが出来よう。』

この時は疑う様な考えは思い付かなかった、ただ力が欲しかった。

「ああアンタに従うよ、で？何をしたら良いんだい？」

『今日の日没後、又ここに来るがよい。この村にさよならを告げてな。』

「分かった。それじゃあ支度をしますかね。」

ドレイクは自宅へと向かって行った。

『欲深い者ほど、扱いやすい人間はいないな。』

カイルが乗ってきた竜車は、まだ鍛冶屋の近くに止まっていた。

カイルからちょっと待ってくれと頼まれた以上、この場を動く訳には行かない。

「うゝん、それにしてもカイルさん遅すぎにやゝ。やっぱり宿をとつとした方が良かったかにゃ？」

ジライヤは寝っころがりながら背伸びをして、カイクの帰りを待っていた。

アイルーの楽園

「ZZZ……、んにゃ？」

鼻のあたりにむず痒い感触が走った。

目を開けると、白く小さな蝶が鼻の上で羽を休めているのが見える。

止まり木が動いた事に驚いた蝶はまた羽をヒラヒラと羽ばたき、どこかへと飛んで行ってしまった。

上半身だけを起こし、両手で目を擦り、自分の周りをキョロキョロと見渡すと風景は一変していた。

「……にゃ？ 竜車は……、ココット村はどこにゃ？……。」

自分が乗っていた竜車も、鍛冶屋も村さえ無かった。

そこに有るのは一面の花畑。

所々にさっきの様な蝶や蜜蜂達が花の蜜を集めてる。

「ここはどこなのにゃ？」

立ち上がり、右手で影を作り遠くを見渡すが。

どの方角も地平線まで花畑のようだった。

心地よいそよ風が香りを運んできた。

「……んにゃ、この香りは……。」

すると体が勝手に走り出した。

風が吹いて来た方にはアレがある、そう確信していた。

普段なら二足歩行だが、今は四足で駆け抜ける。

この方が体力を使うが、より速く走れる。

ずっと走った。

途中でつまづいても気にせず走った。

風が吹く方にはアレが待っている。

そう考えただけで力がみなぎってきた。

自分の体じゃないような不思議な感覚だった。

次第にスピードを落とし、二足歩行で立ち止まる。

疲れた訳では無い。

目的のアレがそこに有ったからだ。

「……こ……これは……、天国にゃ。」

今までの花畑が無くなり、代わりにマタタビがたくさん育っていた。

見渡す限りマタタビ畑。

これほどの幸福は無かった。

ジライヤは両手いっぱいマタタビを摘み取り、マタタビ畑に寝っ転がった。

「こんな幸せ初めてだにゃ。」

走った疲れが今頃きたのか、ジライヤの目はうつろうつろとしていた。

そよ風も子守唄の様に聴こえていた。

幻のマタタビ

「ジライヤくん。」

遠くから駆け寄ってくる赤いやつ。

「……アズナ？何でここにいるのにや？」

赤いやつは手を振りながら走ってくる。

最愛の友との突然の再会にジライヤは驚き、飛び起きた。

蘇ってくる幼き日々。

そして、あいつとの別れ。

「アズナって誰ですか？」

ジライヤは目を擦りながら、まだ眠たそうにしている。

「あれ？カイクさんにや？」

ギルドから出た時、馬車はまだ鍛冶屋の前で止まっていた。

そういえばアレから何も指示を出していなかった……、今はそれの方が都合が良い。

馬車の運転席ではジライヤが手綱を胸に抱くように持って寝ていて。

起こした途端、初めて聞く名前を口にしていたが。

夢でも見ていたのか。

「カイクさんコレを見るにゃ。」

ジライヤは満面の笑みで持っている物を前に差し出している。

うん、手綱だねえ。

「うん、手綱ですね。」

思っているそのままの台詞しか出てこなかった。

「カイクさんでも冗談を言うにゃのね。どう見てもマタビ……、にゃに？」

自分が持っている物を理解出来たのか、ジライヤは手をプルプルと震わせて、今にも泣き出しそうな顔に変わっていった。

彼にはどうやら、幻のマタビが見えていたのだろう。

そんな彼を慰めてあげたいが、今はそれどころでは無い。

「ジライヤ君、予定変更です。今すぐココット村を離れ、ギルド本部へ戻ります。」

「はいにゃ……。」

ジライヤの耳はシュンと萎れてしまっている。

よほどショックだったのだろうか。

人間にとつてはただの植物に過ぎないが、猫獣人には金よりも価値があると昔聞いた事がある。

「本部に帰ったら、報酬は弾みますよ。」
マタビ

カイムの耳元で囁く攻撃。

萎れていた両耳は一瞬にして逆立った。

ナルガクルガの尻尾も真っ青なほどに。

「カイムさん何をモタモタしてるにゃ〜！早く後部座席に乗り込むにゃ！」

効果は抜群のようだ。

「事情は後で聞くにゃ、ミナガルデまで直行にゃ〜！」

ジライヤはマタタビ、もとい手綱をピシピシと勢い良く振り、竜車を村の出口へと急がせた。

幻を現実へと変えるために。

英雄の誕生

ミナガルデはまだ遠い。

ジライヤに予定変更の理由を大まかに説明し終えてしまった。

説明しながら、ココット村で起きたことを振り返ってみても。

自分自身がまだ受け止めきれしていない。

そう、最初はただの調査のつもりだった。

私が調査をすると決まった時から、こうなる事は決まっていたの
だろうか。

それとも、もっと以前からか。

世界を危機においやった自分。

それを止めるのも私の定めだという。

おとぎ話、伝説と思っていたこと。

本来の目的は果たすことが出来ず。

代わりにおとぎ話の怪物と、伝説の剣をお土産に戻ることになる
とは。

英雄とは、戦いで誕生するのではなく。

戦いを自ら作り、そして自ら戦うことで誕生するものなのかも知
れない。

もし神がいるとするならば。

この茶番の繰り返しを、嘲笑うかの様に見ている事だろう。

『伝説の双剣に関する報告書』より。

筆頭者：カイク・エドファード

黒龍伝説

第五部

伝説の双剣

完

英雄の誕生（後書き）

伝説の双剣を最後まで読み、なおかつあとがきまで読んで頂き、
ありがとうございますm(____)m

今更ですがご挨拶が遅れました。

龍帝元祖と書いて龍帝ルーツと呼びますm(____)m

この小説の舞台はココット村と言う村で、初代モンハン（MH）
の舞台であります。

実際は伝説の剣、ヒーローブレイドは、初代モンハンで村クエの
リオレウスを初討伐後に抜く事ができ。

初代モンハンG（MHG）で双剣が追加され、さらにモノプロス
を討伐することで、伝説の剣を村長からもらえ、ヒーローブレイド
を伝説の双剣に強化出来るのです。

それを題材にして以前他のサイトで小説を作ったのですが。

それをちょこちょこ修正しながら書いております。

長々とすみませんでした（^^；

今後とも、御愛読よろしく願いしますm(____)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9367r/>

伝説の双剣

2011年10月8日22時07分発行